

本文

本文

世の中に、とにかくに心のみつくすに、①(宮仕へとても、もとは、ひとすぢに仕うまつりつかばや
いかがあらむ)。時々たち出でば、なになるべくもなかめり。年はややさだ過ぎゆくに、若々しきや
うなるも、つきなうおぼえならるうちに、身の病、いと重くなりて、心にまかせて物語でなどせしこ
ともえせずなりたれば、わくらばのたち出でも絶えて、長らふべき心地もせぬままに、幼き人々
を、いかにもいかにも、わがあらむ世に見おくこともがなと、臥し起き思ひ嘆き、たのむ人のよろこ
びのほどを、心もとなく待ち嘆かるに、秋になりて、待ち出でたるやうなれど、思ひしにはあら
ず、②(いと本意なくくちをし)。親のをりよりたちかへりつつ見しあづま路よりは近きやうに聞こゆ
れば、いかがはせむにて、ほどもなく下るべきことどもいそぐに、門出は、むすめなる人のあたら
しくわたりたる所に、八月十余日にす。後のことは知らず、そのほどのありさまは、もの騒がしきま
で人多く勢ひたり。

二十七日に下るに、をとこなるは添ひて下る。紅の打ちたるに、萩の襖、紫苑の織物の指貫着
て、太刀はきて、しりに立ちて歩み出づるを、それも織物の青鈍色の指貫、狩衣着て、廊のほど
にて馬に乗りぬ。③(ののしり満ちて)下りぬる後、こよなうつれづれなれど、いといたう遠きほどな
らずと聞けば、さきぎきのやうに心細くなどはおぼえであるに、送りの人々、またの日かへりて、
「いみじうきらきらしうて下りぬ」などいひて、「この暁に、いみじく大きな人魂のたちて、京ざまへ
(A)来ぬる」と語れど、供の人などにこそは、と思ふ。④(ゆゆしきさま)に思ひだによらむやは。

今は⑤(いかでこの若き人々おとなびさせむ)、と思ふよりほかのことなきに、かへる年の四月に
上り来て、夏秋も過ぎぬ。

九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふ心地、世の中に、また
たぐひあることとおぼえず。

初瀬に鏡たてまつりしに、臥しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげ
なりけむ影は、来し方もなかりき。今ゆくすゑはあべいやうもなし。二十三日、はかなく雲煙にな
す夜、去年の秋、いみじくしたてかしづかれて、うち添ひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上に
ゆゆしげなる物を着て、車の供に泣く泣く歩み出でてゆくを見出しだして、思ひ出づる心地、すべ
てたとへむ方なきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見にけむかし。

昔より、⑥(よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いと
かかる夢の世をば見ずもやあらまし)。初瀬にて、前の度、「稲荷より賜ふるしるしの杉よ」とて投
げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神
を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、帝、後の御かげにかくる
べきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは、一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見
し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のおかなふ方なうてやみぬる人なれ
ば、功德もつくらずなどして、ただよふ。

(注)

- 心のあつくす＝あれこれと気ばかりもむ。
- たち出でば＝宮廷に出仕したなら。
- さだ過ぎゆく＝盛りの年齢を過ぎる。
- わくらばの＝たまの。
- たのむ人のよろこび＝夫の任官のこと。
- あづま路＝東国。作者の父がかつて赴任していた地。
- いそぐ＝準備する。
- むすめなる人＝作者の義理の娘。
- あたらしくわたりたる所＝嫁いだ所。
- をとこなる＝作者の長男。
- 紅の打ちたる＝紅の布地を打って艶を出した桂のこと。
- 萩の襖＝表がくすんだ赤色で裏が青色の、若い人向けの秋の衣。
- 紫苑の織物の指貫＝青と薄紫の色で模様を織った布で作った、紐で足元を結ぶ袴。
- それも＝夫も。
- 青鈍色＝青みがかった薄墨色。
- 廊＝渡り廊下。
- かへる年＝翌年。
- 見ないて＝「見なして」のイ音便化。夫の死を見届けて。
- 初瀬＝現在の奈良県桜井市にある長谷寺。
- 鏡たてまつりし＝作者の母親が、かつて僧に託して鏡を奉納し娘の将来を占わせたことをさす。
- 影＝鏡に写った姿。
- 雲煙＝火葬。
- ゆゆしげなる物＝喪服の上に着る短い袖無しの白い衣。

○稲荷＝現在の京都市伏見区にある伏見稲荷大社のこと。この境内の杉の木を折って持ち帰ると霊験があると信じられていた。

○夢とき＝夢占いをする者。

平文

平文

世の中に、とにかくに心のみつくすに、宮仕へとても、もとは、ひとすぢに仕うまつりつかばやいか
があらむ。時々たち出でば、なになるべくもなかめり。年はややさだ過ぎゆくに、若々しきやうなる
も、つきなうおぼえならるうちに、身の病、いと重くなりて、心にまかせて物語でなどせしこともえ
せずなりたれば、わくらばのたち出でも絶えて、長らふべき心地もせぬままに、幼き人々を、いか
にもいかにも、わがあらむ世に見おくこともがなと、臥し起き思ひ嘆き、たのむ人のよろこびのほ
どを、心もとなく待ち嘆かるるに、秋になりて、待ち出でたるやうなれど、思ひしにはあらず、いと
本意なくちをし。親のをりよりたちかへりつつ見しあづま路よりは近きやうに聞こゆれば、いかが
はせむにて、ほどもなく下るべきことどもいそぐに、門出は、むすめなる人のあたらしくわたりたる
所に、八月十余日にす。後のことは知らず、そのほどのありさまは、もの騒がしきまで人多く勢ひ
たり。

二十七日に下るに、をとこなるは添ひて下る。紅の打ちたるに、萩の襖、紫苑の織物の指貫着
て、太刀はきて、しりに立ちて歩み出づるを、それも織物の青鈍色の指貫、狩衣着て、廊のほど
にて馬に乗りぬ。ののしり満ちて下りぬる後、こよなうつれづれなれど、いという遠きほどならず
と聞けば、さきざきのやうに心細くなどはおぼえであるに、送りの人々、またの日かへりて、「いみ
じうきらきらしうて下りぬ」などいひて、「この暁に、いみじく大きな人魂のたちて、京ざまへ〔A〕
来ぬる」と語れど、供の人などにこそは、と思ふ。ゆゆしきさまに思ひだによらむやは。九月二十
五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふ心地、世の中に、またたぐひあ
ることとおぼえず。初瀬に鏡たてまつりしに、臥しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそ
はありけれ。うれしげなりけむ影は、来し方もなかりき。今ゆくすゑはあべいやうもなし。二十三
日、はかなく雲煙になす夜、去年の秋、いみじくしたてかしづかれて、うち添ひて下りしを見やりし
を、いと黒き衣の上にゆゆしげなる物を着て、車の供に泣く泣く歩み出でてゆくを見出しだして、
思ひ出づる心地、すべてたとへむ方なきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見に
けむかし。昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましか
ば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて、前の度、「稲荷より賜ふるしるしの杉よ」
とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天
照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、帝、後の御かげに
かくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは、一つかなはでやみぬ。ただ悲しげな
りと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のおかなふ方なうてやみぬる人
なれば、功德もつくらずなどして、ただよふ。

(注)

○心のあつくす＝あれこれと気ばかりもむ。

○たち出でば＝宮廷に出仕したなら。

○さだ過ぎゆく＝盛りの年齢を過ぎる。

○わくらばの＝たまの。

○たのむ人のよろこび＝夫の任官のこと。

- あづま路＝東国。作者の父がかつて赴任していた地。
- いそぐ＝準備する。
- むすめなる人＝作者の義理の娘。
- あたらしくわたりたる所＝嫁いだ所。
- をとこなる＝作者の長男。
- 紅の打ちたる＝紅の布地を打って艶を出した桂のこと。
- 萩の襖＝表がくすんだ赤色で裏が青色の、若い人向けの秋の衣。
- 紫苑の織物の指貫＝青と薄紫の色で模様を織った布で作った、紐で足元を結ぶ袴。
- それも＝夫も。
- 青鈍色＝青みがかった薄墨色。
- 廊＝渡り廊下。
- かへる年＝翌年。
- 見ないて＝「見なして」のイ音便化。夫の死を見届けて。
- 初瀬＝現在の奈良県桜井市にある長谷寺。
- 鏡たてまつりし＝作者の母親が、かつて僧に託して鏡を奉納し娘の将来を占わせたことをさす。
- 影＝鏡に写った姿。
- 雲煙＝火葬。
- ゆゆしげなる物＝喪服の上に着る短い袖無しの白い衣。
- 稲荷＝現在の京都市伏見区にある伏見稲荷大社のこと。この境内の杉の木を折って持ち帰ると靈験があると信じられていた。
- 夢とき＝夢占いをする者。

和訳

和訳

世の中のことに、あれこれと気ばかりもんでいるうちに、①(宮仕えという点でも、もとはと言えば、最初から中断せずに一途にお仕え申し上げていたならば、今ごろどうなっていたらうか)。時々出仕したのは、何になるはずもないようだ。年齢はやや盛りを過ぎてゆくのに、若作りであるようなのも、不似合いに感じられずにはいられないうちに、持病がとても重くなって、思いのままに物語などを読むことさえできなくなってしまったので、たまの出仕も絶えて、長く生きられそうな気もしないままに、「幼い子供たちを、なんとかして、自分が生きている間に(将来を)見届けてやりたいものだ」と、寝たり起きたりして思い嘆き、(夫の)頼りにする任官の喜び(の知らせ)を、待ち遠しく思い嘆いていると、

秋になって、(待ち望んでいた知らせを)待ち得たようではあるけれど、思っていたような(よい国)ではなく、②(たいそう不本意で残念だ)。親が生きていた折に(私が)何度も行き来して見た東路(あずまじ＝上総国など)よりは近いように聞こえるので、「どうしようもない(仕方がない)」ということになって、ほどなく(任国へ)下るための準備などを急ぐのだが、門出(の儀式)は、娘である人が新しく移り住んだ所で、八月の十日過ぎに行く。後のことはともかく、その時の様子といったら、もの騒がしいほどに人が多く集まり勢い込んでいる。

二十七日に(夫が任国へ)下る時に、息子である子は付き添って下る。(息子は)紅のつや出しをした(袷の)上に、萩の襖(あお＝上着)、紫苑(しおん)の文様の織物の指貫(さしぬき＝袴)を着て、太刀を佩(は)き、後ろに立って歩み出るのを、それ(＝夫)も織物の青鈍色(あおにびいろ)の指貫と、狩衣を着て、渡り廊下のあたりで馬に乗った。③(大騒ぎして)下ってしまった後は、こよなく手持ち無沙汰で寂しいけれど、(任国は)それほどひどく遠い場所ではないと聞いているので、以前(父が上総へ行った時)のように心細くなどは感じられずにいるのだが、

見送りの人々が、翌日帰ってきて、「たいそう華やかで立派な様子で下っていかれました」などと言って、「この明け方に、たいそう大きな人魂(ひとたま)が立って、京の方へ(A)来てしまった」と語るけれど、(私はそれを不吉なことだとも思わず)「供の人(の魂)などに違いない」と思う。まさか④((夫の身に起きる)不吉なこと)だと思いつくだろうか(いや、思いもしない)。

今はただ⑤(どうにかしてこの若いたちを一人前にしよう)、と思うよりほかのことはない日々の中に、(夫は)翌年の四月に上京してきて、夏も秋も過ぎてしまった。

(夫は)九月二十五日から病気になり始めて、十月五日に夢のように(あっけなく)亡くなって、思う心地は、世の中に、またと類例があることとも思われぬ(ほど悲しい)。

(かつて)初瀬(＝長谷寺)に鏡を奉納した時に、ひれ伏して転げ回るように泣いている(自分の)姿が(鏡に)見えたとかいうのは、このこと(＝夫の死を嘆く姿)であつたのだなあ。(将来の)嬉しそうな姿(が映ること)は、過去にもなかった。今後行く末も(よいことは)あるはずもない。

(十月の)二十三日、(夫の遺体を)はかなく火葬にする夜、(私は)去年の秋、たいそう立派に装束を着て大切に扱われ、付き添って(任国へ)下ったのを見送った(息子の)姿を、とても黒い喪服の上に不吉なもの(＝忌み衣)を着て、霊柩車の供に泣く泣く歩み出ていくのを(家から)見出し続けて、(去年の門出の華やかさを)思い出す心地は、すべてたとえようもないままで、そのまま夢の中に迷い込むように思うのだが、あの人(＝亡き夫)も(今の息子のこの姿を)見たであらうか。

昔から、⑥(つまらない物語や歌のことばかりに夢中にならないで、夜も昼も仏を思って、勤行をしていたならば、本当にこのような夢のようなつらい目に遭わないでもすんだだろう)。初瀬(＝長谷寺)にて、前の度、「稲荷からくださるしるしの杉ですよ」と言って(僧から)投げ出されたのを、出たその足で、稲荷(＝伏見稲荷大社)に参詣していたならば、このようにはならなかっただろうか。

数年来、「天照御神を念じ申し上げよ」と見える夢は、人の御乳母として、宮中あたりにおり、帝や後の御恩恵にあずかるはずの様子ばかりを、夢占いも合わせた(解釈した)けれども、そのこと(＝宮仕えの出世)は、一つもかなわず終わってしまった。ただ悲しげであると見た(長谷寺の)鏡の姿だけが違わないのが、しみじみと情けなくつらい。このようにひたすら心に仏道修行を行う方面のことがなくて終わってしまった人間であるので、功德も積まずなどして、(現世でも来世でも)ただようことだ。

【ストーリー】

後悔(前半): 若い頃、物語にかまけて宮仕え(キャリア)を中途半端にってしまった後悔。

転機: 夫が信濃守になったが、期待外れだった。でも出発の時は華やかだった。

予兆: 出発の翌日、「京へ来る人魂(＝夫の死の予兆)」の噂を聞いたが、当時は気づかなかった。

悲劇: 夫が帰京後、すぐに病死した。

伏線回収: 昔、長谷寺の鏡で見た「泣き崩れる自分の姿」は、この夫の死を嘆く姿だったのだと悟る。

後悔(後半): 物語ではなく仏道修行をしておけばよかった、という深い絶望。

『更級日記』のテーマである「物語への耽溺」と「現実の厳しさ(仏道の欠如)」の対比が、このラストシーンに集約されている。

「人魂」が京の方へ来た(＝夫の魂が京へ戻ってきた＝死ぬ)という解釈は、難関大でも問われるポイント！

問題文と解答・解説

問題文と解答・解説

問一

【問題文】傍線部①「宮仕へとても、もとは、ひとすぢに仕うまつりつかばやいかがあらむ」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】

- ① 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途にお仕え申し上げ上げていたら、どのようになっただろうか。
- ② 宮仕えにしても、中断せずにもっと一途にお仕え申し上げていたら、世間はどのように思っただろうか。
- ③ 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途にお仕え申し上げたかったが、どうにもならなかったのだろうか。
- ④ 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途に打ち込んでお仕え申し上げるには、どのようにしたらよかっただろうか。

【解答】①

【解説】文法的な分解と構文把握が決め手だ。

「仕うまつり(謙譲)」+「つく(尽くす＝し続ける)」:途中で辞めずに最後までやり通すこと。

「(未然形)+ば」:仮定条件。「もし～ならば」。

「いかが(疑問)+あら(動詞)+む(推量)」:「どのようであっただろうか」。

作者は実際には宮仕えを中途半端に辞めてしまっている。だからこそ、「もし辞めずに(ひとすぢに)続けていたならば、今ごろどうなっていただろうか(もっと良い人生だったかもしれない)」という反実仮想的な後悔の念が込められている。選択肢①がこの文法構造と文脈(後悔)を最も正確に反映している。

問二

【問題文】傍線部②「いと本意なくちをし」とありますが、なぜこのように思ったのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】

- ① 期待していたのに夫が任官しなかったから。
- ② 夫の赴任地が期待したほどよいところではなかったから。
- ③ 夫の帰京がなかなか実現しなかったから。
- ④ 夫の赴任地がなかなか決まらなかったから。

【解答】②

【解説】直前の文脈を確認する。

「待ち出でたるやうなれど(辞令は出たようだけれど)」

「思ひしにはあらず(思っていたもの＝期待していた国、とは違う)」

「任官しなかった(①)」わけでも「決まらなかった(④)」わけでもない。「決まった場所が期待外れだった」のだ。さらに直後で「親のをりより...近きやうに聞こゆれば(父が赴任した東国よりは近いから)」と自分を慰めている点からも、場所(距離)に対する不満があったことがわかる。よって、②が正解。事実関係(ファクト)を正確に押さえれば迷わない。

問三

【問題文】傍線部③「ののしり満ちて」の意味として、最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】① 感心して ② 悪口を言って ③ 大騒ぎして ④ あなどり

【解答】③

【解説】重要古語の知識問題だ。

「ののしる」の第一義は「大声で騒ぐ」「大騒ぎする」。

第二義として「評判になる」「羽振りをきかす」。

現代語の「罵る(悪口を言う)」の意味で使われることは、古文では稀だ。

ここでは、夫の任国への出発にあたり、多くの人が集まってざわざわと騒がしく、活気立っている様子を描写している。よって③が正解。

問四

【問題文】空欄 [A] を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】① の ② のみ ③ なむ ④ こそ

【解答】③

【解説】係り結びの法則のパズルだ。文末を確認すると、「京さまへ(A) 来ぬる」となっている。

「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形。

文末が連体形になる係助詞を選ぶ必要がある。

①「の(格助詞)」→文末は変化しない(終止形)。②「のみ(副助詞)」→文末は変化しない(終止形)。③「なむ(係助詞)」→結びは連体形。④「こそ(係助詞)」→結びは已然形(ぬれ)。

よって、文法的に成立するのは③「なむ」しかない。これは知識さえあれば3秒で解けるボーナス問題だ。絶対に落とさないでね！

問五

【問題文】傍線部④「ゆゆしきさま」の内容として、最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】

- ① 作者の息子が任国より帰京している間に亡くなること。
- ② 作者の夫が任国より帰京している間に亡くなること。
- ③ 作者の息子が宮中でお仕えすることがかなわなかったこと。
- ④ 作者の夫が任国にいる間に亡くなること。

【解答】②

【解説】「ゆゆし」は「不吉だ、恐ろしい」という意味。ここでは「人魂(死の予兆)」の話を受けているので、「死」を指す。誰が、いつ死んだのか？ 本文の時系列(ファクト)を追う。

夫が出発する。(人魂の噂が立つ)

「かへる年の四月に上り来て(翌年の四月に帰京して)」

「九月二十五日よりわづらひ出でて(病気になって)」

「十月五日に...見ないて(亡くなって)」

つまり、夫は**「任国から帰京した後」**に亡くなっている。①「息子」→亡くなったのは夫。③「息子が宮仕え～」→無関係。④「任国にいる間に」→帰京後なので誤り。②「帰京している間に亡くなる」→これが事実と合致する。

問六

【問題文】

傍線部⑤「いかでこの若き人々おとなびさせむ」の現代語訳として、最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】

- ① どうにかしてこの幼い子供たちを一人前にさせよう。
- ② どのようにして幼い子供たちを一人前にさせたらいいのだろう。
- ③ どうにかしてこの幼い子供たちを結婚させよう。
- ④ どうすればこの子供たちを結婚させられるだろう。

【解答】①

【解説】

「いかで」+「む(意志)」:「なんとかして～しよう(願望・意志)」。

「おとなび(おとなぶ)」:「大人になる、一人前になる」。

「させ(使役)」:「～させる」。

文脈は、夫を亡くし、残された子供たちを抱えた作者の決意だ。「～と思ふよりほかのことなき(～と思う以外にない)」とあるので、単なる疑問(②④)ではなく、強い意志(①③)である。また、「おとなぶ」を「結婚させる」と訳するのは限定しすぎである(文脈によってはあり得るが、基本義は「一人前になる」)。より原義に近い①が正解。

問七

【問題文】

傍線部⑥「よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

【選択肢】

- ①つまらない物語や歌のことばかりに夢中にならないで、夜も昼も仏を思って、一心に読経などに励んでいたら、本当にこんな夢のようなつらい目に遭わないですんだらう。
- ②つまらない物語や歌のことばかりに夢中になって、夜も昼もそのことばかりで頭の中がいっぱいだったが、もし一心に読経などに励んでいたら、本当にこんな夢のようなつまらない目も見ないですんだらう。
- ③どうでもよい物語や歌のことばかりに夢中になり、夜も昼もその事を思い続けてきたが、もし学問に励んでいたら、本当にこんな夢のような辛い目にも遭わずにすんだらう。
- ④つまらない物語や歌の事ばかりに夢中にならないで、夜も昼も仏を思い、一心に読経などに励んでいたの、本当にこんな夢のような辛い目に遭わないですんだのらう。

【解答】①

【解説】「ましかば...まし」(反実仮想)の構文を正確に訳しているかどうかが鍵。「もしAだったなら、Bだっただろうに(実際はAでなかったの、Bではなかった)」

A:「おこなひをせましかば」

実際:物語に夢中で、行い(仏道修行)をしなかった。

仮定:もし仏道修行をしていたならば。

(ここで③「学問」は×。「おこなひ」は古文では仏道修行を指す)

B:「かかる夢の世をば見ずもやあらまし」

実際:こんな悪夢のような辛い現実(夫の死)を見てしまった。

仮定:こんな辛い現実を見ないですんだらうに。

(ここで④「励んでいたの...すんだのらう」は事実として成立してしまっているの×。反実仮想になっていない)

①と②の比較だが、前半部「～心にしめで(～に心を染めないで)」という打ち消しのニュアンスを①は拾っている。また、②は「つまらない目」と訳しているが、「夢の世」は夫の死という「つらい、悲しい現実」を指すので、①の「つらい目」の方が適切。

問八

【問題文】『更級日記』の作者の名前を次のうちから一つ選びなさい。

【選択肢】① 額田王 ② 菅原孝標女 ③ 藤原道綱母 ④ 和泉式部

【解答】②

【解説】文学史の基本知識問題。

『更級日記』＝菅原孝標女(すがわらのたかすえのむすめ)

①額田王(ぬかたのおおきみ):万葉集の代表的歌人。

③藤原道綱母(ふじわらのみちつなのはは):『蜻蛉日記』の作者。

④和泉式部(いずみしきぶ):『和泉式部日記』の作者。

これら平安女流日記文学の作者名は、中堅私大では頻出事項だ。確実に暗記しておくこと。

練習問題

練習問題(2016龍谷:一般の復習問題)

【第一章 文学史・常識】

問一 次の日記文学とその作者の組み合わせとして誤っているものを一つ選べ。

- ア 『土佐日記』—— 紀貫之
- イ 『蜻蛉日記』—— 藤原道綱母
- ウ 『紫式部日記』—— 紫式部
- エ 『更級日記』—— 和泉式部
- オ 『十六夜日記』—— 阿仏尼

問二 『更級日記』の作者が、少女時代に熱中していた物語は何か。次から選べ。

- ア 『伊勢物語』イ 『源氏物語』ウ 『竹取物語』エ 『平家物語』

【第二章 重要単語】

問三 次の各文の()内の単語の意味として最も適当なものを選べ。

(1) (おこなひ)し給ふさま、いと尊し。

- ア 家事 イ 仏道修行 ウ 和歌の稽古

(2) 夢見(ゆめみ)が悪かったので、今日はまことに(ゆゆしき)心地がす。

- ア すばらしい イ おもしろい ウ 不吉だ

(3) 鏡に(かげ)見ゆ。

- ア 幽霊 イ 光 ウ 姿

(4) 船に乗るべき所へ(ののしり)て行く。

- ア 悪口を言い合って イ 大騒ぎして ウ 無視して

【第三章 文法・識別】

問四 次の助動詞「ぬ」の文法的意味(完了・強意・打消など)と活用型を答えよ。

- (1) 京ざまへ来ぬる。(更級日記本文より)
- (2) 行きもやらす。
- (3) 花咲きぬ。

問五 「AましかばBまし」は、どのような訳になるか。

問六 次の文の「る・らる」の意味を「受身・尊敬・自発・可能」から選べ。

- (1) つきなうおぼえならるうちに(更級日記本文より)
- (2) 湯水も飲まれず。
- (3) 人に笑はる。

【第四章 本文読解】

問七 今回の『更級日記』の本文の内容と合致していれば○、間違っていれば×を答えよ。(1) 作者は、夫が信濃守になったことを、期待通りの素晴らしい結果だと喜んだ。(2) 作者の夫は、任国である信濃国に滞在している最中に病気で亡くなった。(3) 夫の出発の翌日に噂された「京へ来る人魂」は、結果的に夫の死の予兆であったと作者は解釈している。

解答・解説

【第一章 文学史・常識】

問一 解答:エ

解説:『更級日記』の作者は菅原孝標女(すがわらのたかすえのむすめ)。和泉式部は『和泉式部日記』の作者。この「平安女流日記セット」は、私大入試の定番。

問二 解答:イ

解説:『更級日記』といえば「源氏物語」。「源氏物語を読みたくて薬師仏に祈る」というエピソードは、この作品の代名詞。

【第二章 重要単語】

問三 (1) 解答:イ(仏道修行)

解説: 古文で「おこなひ(行ひ)」と来たら、単なるアクションではなく「仏道修行(勤行・読経)」を指すことが多い。本文でも「おこなひをせましかば(仏道修行をしていたら)」という文脈で使われている。

問三 (2) 解答:ウ(不吉だ)

解説:「ゆゆし」は程度が甚だしいことを指す。文脈によって「すばらしい」にも「不吉だ(恐ろしい)」にもなるが、今回は「不吉だ」の意味。プラスとマイナスの両義語は文脈判断が命。

問三 (3) 解答:ウ(姿)

解説:「影」は古文では「光」か「(光の反射で映った)姿」のどちらか。鏡や水面の話なら「姿」と訳すのが定石。

問三 (4) 解答:イ(大騒ぎして)

解説:「ののしる」=「大声で騒ぐ」。現代語の「罵倒する」に引っ張られるな。

【第三章 文法・識別】

問四 (1) 解答:完了・連体形

解説:「ぬる」は完了「ぬ」の連体形。直前に係助詞「なむ」がある(と補う)係り結び、あるいは文脈的な連体止めだ。

問四 (2) 解答:打消・連体形

解説:「ず・ず・ず・ぬ・ね・〇」の「ず」は終止形。未然形「やら」に接続している点からも打消と判断する。「行きもやら」は「やる」の未然形。「～ない」と訳す。

問四 (3) 解答:完了・終止形

解説:「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」の「ぬ」。連用形「咲き」に接続しているから完了。「～た」「～てしまった」と訳す。

問五 解答:もしAだったなら、Bだったのに

解説: 反実仮想だ。「現実とは逆の仮定(～ましかば)」+「現実とは逆の結果の推量(～まし)」のセット。「もし～だったなら、...だっただろうに(実際は違う)」というニュアンスを叩き込もう!

問六 (1) 解答:自発

解説:「知覚動詞(思ふ、見る、泣くなど)＋る・らる」は自発(自然と～される)の可能性が高い。「おぼえ(思われ)＋なる(ずにはいられない)」。「自然と思われる」と訳す。

問六 (2) 解答:可能

解説: 打消「ず」を伴う「る・らる」は可能(～できる)の可能性が高い。「湯水も飲むことができない」と訳す。

問六 (3) 解答:受身

解説:「人に～」とある場合は受身の確率が高い。「～れる」と訳す。

【第四章 読解ファクトチェック】

問七 (1) 解答:×

解説:「思ひしにはあらず、いと本意なく」とある。期待外れでガッカリしたのが事実。

問七 (2) 解答:×

解説: 引っかけ。夫は任期を終えて「かへる年の四月に上り来て(帰京して)」から、その年の秋に亡くなっている。「任国にいる間」ではない。

問七 (3) 解答:○

解説: 当時は「供の人」のことだと思って気にしなかったが、夫が死んだ今となっては、あれは夫の死の予兆(夫の魂が京へ去ったこと)だったのだ、と回想している。

頻出古典年表

頻出古典年表

平安の「雅(みやび)」から、鎌倉の「無常」への変遷。おぼえよう！

1. 平安時代 前期(9世紀～10世紀前半)

【キーワード: 仮名文学の黎明期・歌物語】

漢文中心の世界から、「ひらがな」による日本独自の表現が生まれた時期。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
古今和歌集	勅撰和歌集	紀貫之ら	最初の勅撰和歌集。「仮名序」は古文出典としても頻出。歌風は理知的・繊細(たをやめぶり)。
伊勢物語	歌物語	未詳	主人公は在原業平がモデル。和歌を中心とした短編集。後の物語文学に多大な影響。
竹取物語	作り物語	未詳	物語の祖。伝奇的な要素が強い。
土佐日記	日記	紀貫之	男が女のフリをして書いた旅日記。ユーモアと批評精神。

2. 平安時代 中期(10世紀後半～11世紀)

【キーワード: 女流文学の黄金期・摂関政治の全盛】

藤原道長らが権勢を振るった時代。宮廷サロンを中心に女性作家が活躍。「もののあはれ」と「をかし」。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
蜻蛉日記	日記	藤原道綱母	一夫多妻制への不満と嫉妬。赤裸々な心情描写。
枕草子	随筆	清少納言	「をかし」(知的な面白さ)。定子サロン(後宮の女たちの社交界)の明るさと機知。
源氏物語	作り物語	紫式部	「もののあはれ」(しみじみとした情趣)。彰子サロン(後宮の女たちの社交界)。心理描写の極致。
紫式部日記	日記	紫式部	宮仕えの苦悩と同僚(清少納言・和泉式部)への批評。
和泉式部日記	日記	和泉式部	敦道親王との情熱的な恋愛の記録。贈答歌が多い。
更級日記	日記	菅原孝標女	『源氏物語』に憧れる文学少女の半生。夢と現実のギャップ。
大和物語	歌物語	未詳	『伊勢物語』の影響を受ける。説話的な要素が増す。

3. 平安時代 後期(11世紀末～12世紀)

【キーワード:院政期・歴史の回顧・説話の台頭】

貴族社会に陰りが見え始め、過去の栄華を振り返る歴史物語や、庶民の姿を描く説話が登場する。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
大鏡	歴史物語	未詳	藤原道長の栄華を批判的に語る。「四鏡」の最初。
今昔物語集	説話	未詳	インド・中国・日本の説話を集大成。「今は昔」で始まる。文体が野太い。
堤中納言物語	作り物語	未詳	短編集。「虫めづる姫君」など、一風変わった人物が登場。

4. 鎌倉時代 前期～中期(13世紀)

【キーワード: 無常観・隠遁・仏教説話】

武士の台頭と戦乱により、「世の中は儚い」という無常観が文学の基調となる。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
新古今和歌集	勅撰和歌集	藤原定家ら	後鳥羽上皇の命で編纂。絵画的・象徴的な歌風(幽玄・有心)。
方丈記	随筆	鴨長明	無常観の代表作。天災の記録と隠遁生活。対句表現。
平家物語	軍記物語	未詳	琵琶法師によって語られた。「盛者必衰」の理。和漢混交文。
宇治拾遺物語	説話	未詳	MARCH ・関関同立 頻出。教訓や笑い話を含む世俗説話が多い。
十訓抄	説話	未詳	青少年のための教訓集。
古今著聞集	説話	橘成季	懐古的。貴族社会の話題(和歌・管弦など)が多い。
十六夜日記	日記	阿仏尼	訴訟のため鎌倉へ下る。母性愛と紀行文。

5. 鎌倉時代 末期 ～ 南北朝・室町(14世紀以降)

【キーワード: 擬古文・多様化】

古典への回帰(擬古文)と、新しい芸能(能・狂言)への移行期。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
徒然草	随筆	兼好法師	無常観を基盤にしつつ、多趣味で現実的な視点を持つ。私大入試の王様。
増鏡	歴史物語	未詳	『大鏡』のスタイルを模倣した編年体。後鳥羽上皇らを公家視点で描く。
沙石集	説話	無住	仏教の理を説くが、ユーモラスな話も多い。

6. 江戸時代(17世紀～)

【キーワード: 俳諧・国学】

松尾芭蕉などの紀行文や、国学者(本居宣長など)の文章が出る事もある。

作品名	ジャンル	作者	特記事項・入試ポイント
奥の細道	紀行	松尾芭蕉	俳諧の精神に基づく紀行文。「月日は百代の過客にして～」。
玉勝間	随筆	本居宣長	国学者の随筆。古語や和歌の研究、学問論など。

プロンプト

プロンプト

以下の設問に答えよ。ただし、傍線部①は「①(文章)」という形式で表している。②以降も同様。

本文

世の中に、とにかくに心のみつくすに、①(宮仕へととも、もとは、ひとすぢに仕うまつりつかばやいかがあらむ)。時々たち出でば、なになるべくもなかめり。年はややさだ過ぎゆくに、若々しきやうなるも、つきなうおぼえならるうちに、身の病、いと重くなりて、心にまかせて物語でなどせしこともえせずなりたれば、わくらばのたち出でも絶えて、長らふべき心地もせぬままに、幼き人々を、いかにもいかに、わがあらむ世に見おくこともがなと、臥し起き思ひ嘆き、たのむ人のよろこびのほどを、心もとなく待ち嘆かるに、秋になりて、待ち出でたるやうなれど、思ひしにはあらず、②(いと本意なくくちをし)。親のをりよりたちかへりつつ見しあづま路よりは近きやうに聞こゆれば、いかがはせむにて、ほどもなく下るべきことどもいそぐに、門出は、むすめなる人のあたらしくわたりたる所に、八月十余日にす。後のことは知らず、そのほどのありさまは、もの騒がしきまで人多く勢ひたり。

二十七日に下るに、をとこななるは添ひて下る。紅の打ちたるに、萩の襖、紫苑の織物の指貫着て、太刀はきて、しりに立ちて歩み出づるを、それも織物の青鈍色の指貫、狩衣着て、廊のほどにて馬に乗りぬ。③(ののしり満ちて)下りぬる後、こよなうつれづれなれど、いといたう遠きほどならずと聞けば、さきざきのやうに心細くなどはおぼえであるに、送りの人々、またの日かへりて、「いみじうきらきらしうて下りぬ」などいひて、「この暁に、いみじく大きな人魂のたちて、京ざまへ(A)来ぬる」と語れど、供の人などにこそは、と思ふ。④(ゆゆしきさま)に思ひだによらむやは。

今は⑤(いかでこの若き人々おとなびさせむ)、と思ふよりほかのことなきに、かへる年の四月に上り来て、夏秋も過ぎぬ。

九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見ないて、思ふ心地、世の中に、またたぐひあることとおぼえず。

初瀬に鏡たてまつりしに、臥しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は、来し方もなかりき。今ゆくすゑはあべいやうもなし。二十三日、はかなく雲煙になす夜、去年の秋、いみじくしたてかしづかれて、うち添ひて下りしを見やりしを、いと黒き衣の上にゆゆしげなる物を着て、車の供に泣く泣く歩み出でてゆくを見出しだして、思ひ出づる心地、すべてたとへむ方なきままに、やがて夢路にまどひてぞ思ふに、その人や見にけむかし。

昔より、⑥(よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし)。初瀬にて、前の度、「稲荷より賜ふるしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、帝、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは、一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のおかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつくらずなどして、ただよふ。

(注)

- 心のあつくす＝あれこれと気ばかりもむ。
- たち出でば＝宮廷に出仕したなら。
- さだ過ぎゆく＝盛りの年齢を過ぎる。
- わくらばの＝たまの。

- たのむ人のよろこび＝夫の任官のこと。
- あづま路＝東国。作者の父がかつて赴任していた地。
- いそぐ＝準備する。
- むすめなる人＝作者の義理の娘。
- あたらしくわたりたる所＝嫁いだ所。
- をとこなる＝作者の長男。
- 紅の打ちたる＝紅の布地を打って艶を出した袿のこと。
- 萩の襖＝表がくすんだ赤色で裏が青色の、若い人向けの秋の衣。
- 紫苑の織物の指貫＝青と薄紫の色で模様を織った布で作った、紐で足元を結ぶ袴。
- それも＝夫も。
- 青鈍色＝青みがかった薄墨色。
- 廊＝渡り廊下。
- かへる年＝翌年。
- 見ないて＝「見なして」のイ音便化。夫の死を見届けて。
- 初瀬＝現在の奈良県桜井市にある長谷寺。
- 鏡たてまつりし＝作者の母親が、かつて僧に託して鏡を奉納し娘の将来を占わせたことをさす。
- 影＝鏡に写った姿。
- 雲煙＝火葬。
- ゆゆしげなる物＝喪服の上に着る短い袖無しの白い衣。
- 稻荷＝現在の京都市伏見区にある伏見稻荷大社のこと。この境内の杉の木を折って持ち帰ると霊験があると信じられていた。
- 夢とき＝夢占いをする者。

設問

問一 傍線部①「宮仕へととも、もとは、ひとすぢに仕うまつりつかばやいかがあらむ」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途にお仕え申し上げ上げていたら、どのようになっていただろうか。
- ② 宮仕えにしても、中断せずにもっと一途にお仕え申し上げていたら、世間はどのように思っただろうか。
- ③ 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途にお仕え申し上げたかったが、どうにもならなかったのだろうか。
- ④ 宮仕えにしても、最初から中断せずに一途に打ち込んでお仕え申し上げるには、どのようにしたらよかっただろうか。

問二 傍線部②「いと本意なくくちをし」とありますが、なぜこのように思ったのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 期待していたのに夫が任官しなかったから。
- ② 夫の赴任地が期待したほどよいところではなかったから。
- ③ 夫の帰京がなかなか実現しなかったから。
- ④ 夫の赴任地がなかなか決まらなかったから。

問三 傍線部③「ののしり満ちて」の意味として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 感心して
- ② 悪口を言って
- ③ 大騒ぎして

④ あなどり

問四 空欄 [A] を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① の
- ② のみ
- ③ なむ
- ④ こそ

問五 傍線部④「ゆゆしきさま」の内容として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① 作者の息子が任国より帰京している間に亡くなること。
- ② 作者の夫が任国より帰京している間に亡くなること。
- ③ 作者の息子が宮中でお仕えすることがかなわなかったこと。
- ④ 作者の夫が任国にいる間に亡くなること。

問六 傍線部⑤「いかでこの若き人々おとなびさせむ」の現代語訳として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① どうにかしてこの幼い子供たちを一人前にさせよう。
- ② どのようにして幼い子供たちを一人前にさせたらいいのだろう。
- ③ どうにかしてこの幼い子供たちを結婚させよう。
- ④ どうすればこの子供たちを結婚させられるだろう。

問七 傍線部⑥「よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし」の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① つまらない物語や歌のことばかりに夢中にならないで、夜も昼も仏を思って、一心に読経などに励んでいたら、本当にこんな夢のようなつらい目に遭わないですんだだろう。
- ② つまらない物語や歌のことばかりに夢中になって、夜も昼もそのことばかりで頭の中がいっぱいだったが、もし一心に読経などに励んでいたら、本当にこんな夢のようなつまらない目も見ないですんだだろう。
- ③ どうでもよい物語や歌のことばかりに夢中になり、夜も昼もそのことを思い続けてきたが、もし学問に励んでいたら、本当にこんな夢のようなつらい目にも遭わないですんだだろう。
- ④ つまらない物語や歌のことばかりに夢中にならないで、夜も昼も仏を思い、一心に読経などに励んでいたので、本当にこんな夢のようなつらい目に遭わないですんだのだろう。

問八 『更級日記』の作者の名前を次のうちから一つ選びなさい。

- ① 額田王
- ② 菅原孝標女
- ③ 藤原道綱母
- ④ 和泉式部